

九州大学大学院「ライブラリーサイエンス専攻」について：記録管理・アーカイブに大いなる夢を託して

三輪，宗弘

九州大学附属図書館付設記録資料館産業経済資料部門：教授 | 九州大学大学文書館大学史資料室：教授

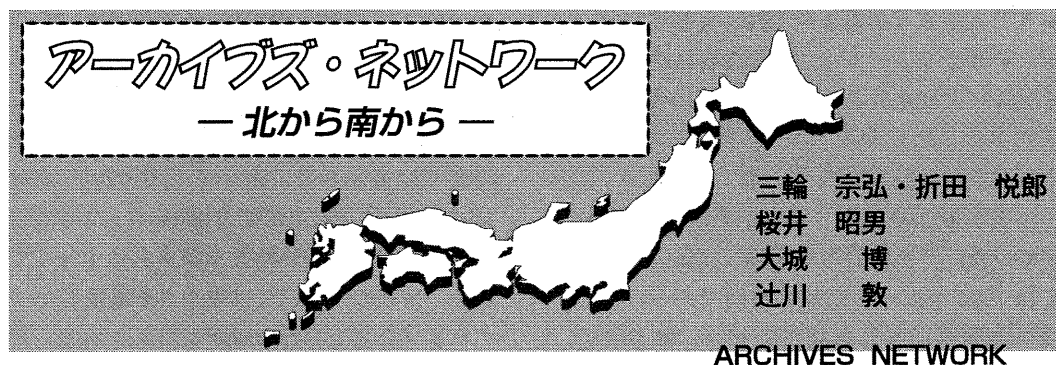
折田，悦郎

九州大学附属図書館付設記録資料館産業経済資料部門：教授 | 九州大学大学文書館大学史資料室：教授

<https://hdl.handle.net/2324/24553>

出版情報：記録と史料. 22, pp.78-82, 2012-03-31. The Japan Society of Archives Institutions
バージョン：
権利関係：





三輪 宗弘・折田 悦郎
 桜井 昭男
 大城 博
 辻川 敦

九州大学大学院「ライブラリーサイエンス専攻」について

—記録管理・アーカイブに

大いなる夢を託して—

はじめに

九州大学は2011年4月に大学院統合新領域に新しい専攻である「ライブラリーサイエンス専攻」(修士課程、10名)を立ち上げた。同専攻の構想や基本的な考え方に關してはすでに報告が行われている¹⁾。「九州大学大学院「ライブラリーサイエンス専攻」の構想と意義」(『情報管理』、54巻2号)では、文部科学省に提出した設置申請書に基づき、懇切丁寧に説明されている。また「大学図書館職員の育成・確保に向けた新たな取り組み」(『図書館雑誌』106巻11号)では、2007年6月に当時附属図書館長であった有川節夫の「図書館・図書館職員を向上させ、一ランク上に位置づけ、世界標準のトップレベルにするには何をすべきか」が記されている。この二つの論考でほぼ九州大学の「ライブラリーサイエンス専攻」の概要はつかむことができる。本稿では重複をできるだけ避け、筆者ら二人の記録管理学やアーカイブ学、大学文書館の在り方との関係に重点を置き、どのような考え方をもち、常に軌道修正しながら構想を練っていたのかを自由に記述したいと思う。文部科学省に提出した設置申請書の準備や立ち上げに用意したもので、実際には検討材料で終わったものもあるが、筆者らの試行錯誤や何をどのように考えていたのか(特に記録

管理やアーカイブ)が伝わればと考える次第である。

1. 高邁な理想を求めて

筆者らの一人である三輪は、図書館情報学の第一人者として慶応大学で長年教壇に立たれ、また国立公文書館館長として記録管理に造詣が深い高山正也館長に、九州大学が統合新領域学府の中に新たな専攻(記録管理学やアーカイブ学に關連する専攻)を立ち上げる上で何が大切であるのか様々な角度からお話をいただいた。高山館長への聞き取りで筆者が印象に残ったのは「官民ともに、現用と非現用の文書を一貫的に管理するというが、その理念がないし、組織のガバナンスと文書記録の關係づけが弱い。そこで、そのような教育をする学部や大学院は必要である。現用文書の管理をしっかり行ってから非現用文書をアーカイブへ移管するという考え方が大切である。」と明言されたことであつた。このことは今回明らかになった政府の震災対策会議の議事録不在問題でも図らずも立証された。「大学院である以上學問分野として今後確立していくのかどうかということは大切なこと」とであると、激励をいただいた。「ライブラリーサイエンス、アーカイブが『學問』かどうかという点に關しては、すでに国際的な学会誌もあり、研究報告の場がある。ICAという国際交流の場もある。ここではアーカイブ教育とアーカイブ研究のそれぞれの部会がある。実証的な分野であり、pure scienceではないが、応用科学としての學問分野であ

る。」と、大学院に新しい専攻として図書館情報学と記録管理学・アーカイブ学の両方(プラス接着剤の情報IT)をバックボーンとする九州大学のライブラリーサイエンス専攻の立ち上げに賛同いただいたのは心強かった²⁾。ただ「ライブラリーサイエンス」という名称については再考の余地があるのではないかというご指摘もいただいた³⁾。

また、「九州大学は、筑波大学や慶応大学と競合するという点は心配する必要がない。筑波と慶応は公共図書館をターゲットにしており、専門図書館をターゲットにしている九州大学の新学府構想とは異なっている。九州大学では現用文書と非現用文書の一貫的な管理というものを打ち出そうとしている。」と述べられ、「現用文書の管理からアーカイブへという文書のライフサイクル管理というつながりを視野に入れたカリキュラムを考えている。」点を高く評価していただいた。

新しい専攻である以上、大学院生の出口は確保できるのか、需要はあるのか、今後日本で普及する可能性はあるのかという点に関する見通しも新しい専攻にとってはとても重要な課題であった。就職先に関してはこの分野で開拓者である日本レコードマネジメント㈱から様々な情報を提供いただき、電力業界と医薬品業界などデータの管理が不可欠な業界を中心に修士課程卒業生の需要もあることが理解できた。日本レコードマネジメント会社では、全体を指揮・統括できるレコードマネジャーの養成が急務であり、リーダーシップを兼ね備えた記録管理の専門家が日本の社会で今後必要な人材とされていることを懇切丁寧に語っていただいた。

次の文章は筆者らの一人が作成した「記録管理学コースの理念(案)」(三輪宗弘、学内用のたたき台素案)である。手前味噌であるが、掲載したい。読者賢者にはお読みいただければわかるが、学習院大学アーカイブズ専攻の格調高い文章「民主主義云々」も借用して取り入れさせていただいた⁴⁾。

「なぜ「記録管理」学が大切なのでしょうか。なぜアーカイブ学が必要なのでしょうか。

日本の国立公文書館と比較すると、米国国立公文書館や英国国立公文書館の政府関係文書の質と量の充実ぶりには驚嘆し、学ばなければならないと痛感します。そこで活躍するレコードマネジャーやアーキビストにも感心させられます。一例を挙げましょう。安全保障関係の資料が30年後には公開されますが(非公開のものもあります)、これはシビリアン・コントロール(文民統制)に必要なものです。国家の安全保障の見地から、国家の機密は厳格に管理され守秘されなければなりません、本当にそれが機密に値した文書なのかどうか、また国民の知る権利を担保するためにも、30年後には機密文書を解除し、自ら公開する責任と義務が政府にはあるのです。政府文書の保存と公開のルールがあり、はじめて民主主義が機能していると言えるのです。見方を転じると、これは何を守秘する必要があるかということ把握できているかどうかということにもつながってきます。記録管理学(レコードマネジメント)とアーカイブ学が車の両輪にならない所以でしょう。

これは何も国家機密だけに限った話ではありません。多くの政策決定は後日政策決定の過程が明らかになることで、当事者(政府、地方公共団体、企業など)がどのように政策を決定したのか跡付けることができるのです。様々なレベルで意思決定の過程が明らかになり、今後の政策決定への情報の宝庫となりうるのです。公開された記録(知の財産)から学者が研究を行い、さらに研究成果を踏まえ行政や企業などの組織の意思決定に反映させることができるのです。

この大切な記録資料の管理や公開のあり方がわが国では漠然と認識されているにすぎません。明治以降、我が国は西洋の優れた制度を学び、咀嚼し、吸収し、近代化しましたが、記録管理学・アーカイブ制度導入の動きは最近ではじまったばかりです。残念ながら、制度

として根付いていません。

日本の場合、海外から学問や制度を導入したために、書籍や論文などに関しては、世界の図書館と遜色はありません。国立国会図書館と米国議会図書館と比べて、日本のシステムのほうがすぐれていると思う点が多々あります。しかし欧米の国立公文書館と日本の国立公文書館と比較すると、あまりの格差にわが国はこれでいいのだろうかと思わざるをえません。政策決定にかかわる様々な膨大な記録資料の中から資料を取捨選択し、公開するという制度基盤がまったく形成されていないのです。

九州大学は一人一人が民主主義を支えるという使命感を持ち、統合新領域ライブラリーサイエンス学科の中に記録管理学コース（付記：コースでなくて、記録管理学に力点を置いたカリキュラムに変更）を設置しました。資料を整理して、公開するという地道な小さな日々の努力の積重ねがあつてはじめて、国民一人一人が参加することができる民主主義は成り立つのです。組織の活動は記録管理が適切になされ、説明責任をはたすことができるのです。高邁な理想と使命感を抱き、一緒に学ぼうではありませんか。」

以上、三輪は米英の国立公文書館を訪問する度に感心するのは、情報の公開が民主主義の礎として確立しているということである。一方わが国の現状を鑑みるに、はるかかなたの後進国である。少しでも格差・落差を埋めたいという思いが凝縮している文面である。

2. 白馬の騎士としての「ライブラリーサイエンス専攻」

さて、「ライブラリーサイエンス専攻」構想とは別に九州大学ではキャリア支援センターのポストドクターおよびドクター課程の院生支援の一環として、日本レコードマネジメント(株)と協力して九州大学記録資料館の収集した資料を使って資料の整理を行い、目録を作成する演習を行ったが、大学院で高度な

専門を学んだ学生にサブジェクトライブラリアン・アーキビストとして何らかの形で学問との接点を持ってもらいたい、またそのような就職につながる実習の場を提供し、新天地の開拓に一役買うという狙いがあつた。実際博士課程に進学しても、アカデミックポストは限られており、オーバードクターが滞留し、それどころか半数近くが進路先不明になっている現状がある。このような高学歴流民・難民・高学歴フリーターの新たな活躍の場としてのサブジェクトライブラリアンの専門図書館やレコードマネジャー、アーキビストの文書館、大学図書館を就職先と考え、大学院で学んだことを生かし、活躍してほしいという願いがあつた。このような九州大学のキャリア支援の延長線上に「ライブラリーサイエンス専攻」があるのも事実である。先の高山正也館長と三輪の出会いはこの支援が契機となり、また日本レコードマネジメントとの邂逅の場であつたことも付言しておきたい。

このキャリア支援の観点は有川節夫・渡邊由紀子「大学図書館職員の育成・確保に向けた新たな取り組み」の中でも強調されているが、大学院で学んだ院生の就職先として、高度な知識を生かせるサブジェクトライブラリアンが大学図書館で活躍することが記述されている。九州大学有川総長自らリーダーシップの下で、キャリア支援に取り組んでいる。「ライブラリーサイエンス専攻」はこのミッションを抜きにしては存在しない。

おわりに代えて

一組織の活性化と資料の廃棄の重要性一

筆者らは、現状と日本の課題を見極めて、日本でアーキビスト・記録管理が普及するためにどうすればいいのかという点を考えると、様々な専門を学んだ大学院の修士・博士課程を出た院生に、専門的な研究者ではなく、研究をサポートする新たな活躍の場を提供し、促進するような就職先を目指すべきである、と考えた。リターンマッチとしてのアーキビスト、レコードマネジャーがあってもよ

いと考えた。博士課程進学者の半分以上が行方不明というのはどう考えてもおかしい。記録管理のレコードマネジャーやアーキビストは「白馬の騎士」ではないかと。

アーカイブだけでは就職に不利という認識が出ていた。レコードマネジメントを取り込んで就職対策を強化すべきという方向に舵を切りつつあると感じた。九州大学では理学府、工学府の「情報IT」を専攻する教員に参加していただけるメリットは大きく、この点は積極的にカリキュラムに生かすべきだろう。この情報ITはサブジェクトライブラリアンとレコードマネジャーの垣根を低くして、両者の一体的な教育にはなくてはならないものだと考えた。

オーストラリアではレコードマネジャーとアーキビストの垣根をなくしたレコードキーパーという考え方を取り入れ、実践している。これも非常に参考になった考え方である。筆者らが欧米と日本の組織の違いでいま取り組まなければならない課題だと考えているのは、「日本の組織では3年ほどでローテーションしていく制度が幅広く定着しており、その中で専門職をどのように確立していくのか」という問題である。配置転換の中で専門をどのように継続させていくのか、日本の組織に受け入れられるやり方を模索し、調和させていかなければならないと考えている。「専門でいくのもよい」し、「専門と管理職を兼ね備えることもよい」とするのが、日本のやり方にあるのだろう⁵⁾。日本の現状を踏まえ、漸進的な改革を進めていくべきであろう。

筆者らは「記録の受入と廃棄」が日本では知識・経験が極めて少なく、課題が多いと予想し、三輪が担当する「ライブラリーサイエンス英語」の授業で米国国立公文書館の「評価と廃棄のガイダンス」をテキストに使い、この点は徹底的に鍛えたいと考えた。またこの問題に米国国立公文書館やFBI、ロッキードマーチン社で長年にわたって記録管理に携わったマイケル・ミラー博士から「組織

の活性化」を常に意識してすすめないと、記録管理とは金食い虫であるというマイナスのイメージでしかとらえてもらえず、組織の中で受け入れてもらえなくなると指摘されたが、これも非常に参考になった。「組織の活性化にどのように役立つのか」は「インターンシップの目標と狙い」の中で明記した。レコードマネジャーやアーキビストを目指す大学院生には「組織の活性化」とレコードマネジメントやアーキビストの在り方という観点からインターンシップを活用すべきであると考えた。

以上、九州大学の「ライブラリーサイエンス専攻」の今後に夢を託し、筆を擱きたい。

注

- 1) 渡邊由紀子、富浦洋一、吉田基文、岡崎敦「九州大学大学院「ライブラリーサイエンス専攻」の構想と意義」、『情報管理』(2011年54巻2号)53 - 62頁。有川節夫、渡邊由紀子「大学図書館職員の育成・確保に向けた新たな取り組み」、『図書館雑誌』(2011年、106巻11号)738 - 740頁。
- 2) 高山正也氏への聞き取り。平成21年10月9日三輪のメモ書きより。高山正也「国立公文書館の現状と有識者会議最終報告に基づく改革に要する課題」(Jurist、1373号、2009.3.1)を参照されたい。この報告書も大いに参考になったことを付言しておきたい。
- 3) 高山館長はLibrary ScienceとかLibrary Studiesと英語で呼ばれるが、英語のLibraryは概念が広いが、日本語ですでに定着している「ライブラリー」とした場合には普通の図書館をイメージされるのではないだろうかということであった。後知恵もあるが、ライブラリーを英米の大学図書館がManuscript部門を管轄しているが、日本の大学も課題としてManuscriptを積極的に蒐集していくという意味を込めて、広い「ライブラリー」への一段上への脱皮・変革を迫っていると、筆者らは考えたい。日本の大学図書館がManuscript(大学文書、私文書、企業文書など)を積極的に集め、学問研究に活用するように、制度的に位置づける先駆になればと考えている。日本の図書館は「書籍」という狭い範囲に安住している。電子ジャーナルなど電子化への対応と古い文献や資料も図書館に取り込んでいく方向性を示す「ライブラリー」であると高らかに宣言したい。米国議会図書館や英国ケンブリッジ大学中央図書

館には立派な Manuscript がある。日本の大学も Manuscript 部門を持つべきである。

- 4) 学習院大学アーカイブズ専攻のホームページに書かれた「専攻の目的」の格調高い文面をぜひ読まれたい。

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/g-hum/arch/02senkou.html>

- (5) シカゴ大学司書の奥泉氏によれば、「米国のサブジェクトライブラリアンは課長や部長という大学の組織の中での出世ルートがないので、専門職で技を磨く」傾向があるとのことであった。アメリカは図書館情報学や記録管理の先進国であるが、その制度を優れているからすぐに取り入れるというのは、日本に根付かないだろう。

(九州大学記録資料館長・三輪宗弘 九州大学大学文書館大学資料室長・折田悦郎)